

から「スゲコイ」の電報を受取った。

生島は、大正九年東京での新聞争議の際、報知新聞社の五号活字台を伏下六郎らと譲渡させた事件で刑をつとめたのち、大阪にきて南区広田町の中村印刷所につとめながら大阪印刷工組合Vを組織していた。私はその生島の組合を手伝っていたので、また解雇問題の交渉かと思って行くと、東京から伏下六郎が来ていて紹介された。

伏下は、八太舟三の訳と伝えられる黒色戦線社発行の「パンの略取」を七十冊、ひそかに持参してきたのである。電報は、この「パンの略取」の配布の相談であった。伏下は土地不案内なので、生島と相談して私が案内役をやることになった。

配布先は、旧関西軍旗連盟の関係者、逸見グループ、大串グループ、大阪交通産業労働者組合の四ヶ所が主なところである。ところが問題は、警察にきづかれぬよう、配本と本代回収をすませることにあった。まず未配布のうちに警察に押収されるのをさけるため、誰

も気がつかないところに本をかくさねばならない。

幸い、運動には無関係で、大阪の仲間内では誰も知らない。伏下の親が大阪城の東（現在の城東区）、中浜通りに住んでいるので、そこに預けることになった。しかし伏下はこの家に一度も行ったことがない。夜になるのをまって、伏下と私は「パンの略取」を半分づつ風呂敷に包み、城東線（現在の環状線）の京橋駅で下車。中浜通りにあるという未見の家をさんざん探し回って、やっとみつけた。

それから伏下と私は、この家に小出しに取りにいった。大阪の各グループに配布していったのである。連日いっしょに歩くうちに伏下と私はだんだん親密になり、或る日、彼は私にこう言うのである。「君はまだ独身で、筆頭らしい。東京の友人に養子を頼まれているのを君を世話する」と。そして私の諾否の返事も聞かずに、ひとりで決めてしまった。それはとにかく、筆頭とは恐縮した。筆頭どころか、悪い病気の治療中である。彼があまりに私を信用しているので、つ

い、それを打ちあけるときがなかった。

さて、「パンの略取」は全部配布され、不足するぐらいであった。本代も八分通り回収された頃、警察の眼が動いてきた気配がする。早速に伏下に東京に引き上げてもらった。

当時、大阪府警や特高本部は、伏下が来阪していることを探知していなかった。ただ、東京方面から氏名不詳の人物が来阪していて、私と二人であちこちまわっていることぐらいは、うすうす知っていたようだ。はじめ、余り重要視していなかったが、日がたつにつれ、これはあやしい、何かあるなと、監視の眼を光らせはじめた。それとほんのすれちがいに、伏下は東京へ帰ったのであった。

その直後、静岡の大塚昇が偶然にも、伏下と入れかわったような形で来阪してきた。大塚と伏下とは、申し合わせたように身長、姿かっこうがよく似ている。その大塚と私がうちつれだって、大阪交通産業労働者組合へ遠藤喜一を訪ねていったのである。

ところが、網をはっていた所轄の築港署の特高係は

獲物が引っかけたとはかり小おどしして、「あいつら二人だろ」と、組合事務所にどやどやと踏みこんできた。そして有無をいわせず大塚と私は検束された。私は直ぐ分離されて本町署に預けられ、取調べを受けた。大塚は「俺は検束される理由はない」とずいぶんいきりたって抗議したらしい。警察が間違えた事情を全然知らずに、大塚は伏下の身替りになったわけである。大塚にとっては、とんだ災難であったが、警察の誤認で「パンの略取」の大阪持込みは、とつとつバレず、一冊も押収されずにすんだのであった。

さて、「パンの略取」配布が成功して帰京する伏下を私は大阪駅まで見送った。別にあてにしていたわけではないが、人間の気持ちはおかしいもので、あれほどやかましく言っていた養子のお話を一言も出さずに去ったので、その時なんとなくすっぱかされたような気がした。

だいぶんたってから生島の細君が「養子のお話がある

ことを知らなかったの、あなたには悪いことしたわね……。伏下さんがあなたを重責だとか、女を知らんよんだとか、余り子供扱いにしていたので、つい、何を言ってるの、悪い病気で通院中よ、と喋ってしまっ

たの」と謝まった。これで伏下が急に養子のお話をしなくなったことが、やっとわかった。こうして私は養子になりそこねたのである。

同志小松亀代吉。死の前後 武良二

昭和四十五年一月に鹿児島島の姉の見舞いの帰りに寄ったとき、わりあい元気だった彼が今年（昭和四十六

年）の二月に行ってみると非常に弱っているのに気づいた。その晩、逸見君や家族一同とともに小松君を中心に食膳を囲んだ。ならべられた食事に手をつけよう

としない。声もほとんど出ない。なんとはなしにポケットに手を入ると、小さなミカンが触れた。皮をむき、半分に分けて差し出すと、彼は手を振って食べられないことを示した。あたりはしんみりとしてしまった。彼に分けた半分を食べながら、僕は胸のつまる思

いがした。前にきたときは空港まで送ってくれ、家へふいていた彼なのだが。昨年九月初旬、彼は上京してきたことがある。その時、平岡君と僕と三人で広海君を訪ねたのだが、その帰りに新宿駅前まで並んで歩いていたら小松君が、レールに足を滑らせて倒れた。もう立てないのではないかとあわてたが、その時は大したこともなくすぐ立ち上がったので、やれやれと思った。しかし大阪に帰ってから病院通いをしているとのことだったし、当時からもう病勢は進んでいたのかもしれない。

また昨年十月初旬に上京してきた小松君は、平岡君や佐野君と共に僕のところへ来た。ぼくの「強権主義の解剖」出版についての打合せのためでもあったが、家事上的のこともあったようだ。佐野君の例の女性論を聞き、もっと早く知っていたら、などと言って話に花を咲かせていた。元来、人の話を聞くという立場の黒口な人だったのである。

しかし、彼は情熱的でもあった。彼は村上君と一緒に、山陽道・九州への宣伝行脚をやったことがある。丁度、僕が戦後上海から引揚げて、生地鹿児島市の武町にいたときだった。大阪を振り出しに岡山、広島、佐賀、福岡と、ある時は駅の待合室に夜をあかし、またある時は寺の境内にねたりして鹿児島まで来た。鹿児島島のさかり場で演説をやり、出発の時にも駅のホームで村上君が演説をやりだしたりして、駅員とトラブルを起したこともあった。遠く南の端まで足をのばすというふうなことは、だれにでも出かけることではない。静かに見える彼だったが、内心は情熱に燃える人

であったのだ。

小松君死亡の知らせがあったのは、四月十二日午後一時頃、平岡君からであった。平岡君は足の調子が悪いので行けないと言つ。東京七時二十分の新幹線にやっと間に合ったが、大阪駅から平野の小松君宅までの電車をまちがえ、その間二時間もかかった。小松宅についたのは翌午前一時ごろ。小松宅でも心配してくれなうである。

二階に上ってみると、彼は娘、息子、親族に守られて冷たく横たわっていた。

十三日通夜。十四日告別式。十五日拾骨。彼が生前世話していた納税組合の手で葬式は行なわれた。焼香の順番などが論議されていたようだが、俗事に関知しない同志たちは、ほとんど焼香しなかったようだ。

逸見吉三(大阪)、仲喜二(大阪)、林隆人(大阪)、安田理實子(伊勢)、伊藤誠(大阪)、向井亨(姫路)、平山房子(神戸)、高島洋(神戸)、本多宏盛(神戸)、前田幸長(神戸)君のほか、娘を小松君の長男に嫁が

せて姻戚になる河本乾次（和歌山）君を加えて多数が参加し、広海、林両君の花環が供えられていた。

今は昔

山口 英六

「今は昔」とかいてふとにが笑いた。にんげん回旧談をかくようになったらもうだめだとかねがね思っていたから。

何十年かのち、「戦後京阪神のアナキズム運動史」といったものを誰かがいたとしたら、その中に小松さんは必ず登場されるにちがいない。小松さんをぬきにしては戦後の運動史はかけないし、だいいち運動そのものがなかっただろうとぼくは思う。小松さんは戦前のアナキズム運動を戦後につなぐかけ橋のような役わりをばたされたし、その橋の数はきわめてすくなかっただけに貴重だった。といって、小松さんがつねに戦後の京阪神の運動のホー線のリーダーだったとい

うのではない。小松さんはむしろ自身を運動の後衛として規定し、むくいられることなく、知られることもなく、いわばエンシタノチカフモ主的活動をだまてひきうけてこられた。それがたのまれて、ひきうけたからゆるという風ではなく、みずから進んでひきうけ、あるいはいつでもいっしやいと門をあけて待ちうけ、いったんひきうければ約束をはたす。義務だらいいかげんにはってあくというのではなくて、さらに積極的に一歩も二歩も前に出てやりとげるという風だったから、その存在は重く、ずしりと手ごたえがあった。後に小松さんがいてくれるという安心感がいつもぼくたちにはあった。

戦後、といつても三十二年。その間、小松さんがみずからわだて、あるいはひきつけ、手つだい、後おしごれた運動はかぞえきれないくらい多い。かくれたままのひと、ぬけおちてゆくものあり、にげてゆく人あり、花火のようにあつたれまにきててゆくものありのなかで、小松さんの姿勢は終始かわらなかつたし、その航跡はひとすじ太く途中で消えることもなかつた。

いまその航跡のひとつひとつをくわしくたどることはできないけれども、直接面接にぼくがみ、ききた小松さんの活動の主なものを順序もあやしく、ぬけおちも多いいれどし思いつくままあげてみると。

1、国鉄関西線を中心とする「平民新聞」の車内宣伝販売。この販売はなかなか効果があつて多くの青年たちが小松さん宅を訪れるようになった。

2、JAF西日本地協の開催・研究会、エスプラント語学習会の継続等の活動。

3、「自由市民」の編集と発行。「ひろば」の援助。

4、タイプ印刷所の設置。「リベルテ」「アナキズム」の発行。

5、街頭原爆展の開催。

6、原水協のホー平和行進と、W・R・Iの平和行進への協力。

7、生擁同H支部書記長としての税金斗争。

X X X X X

その他ごまかく指おりかぞえてみると、小松さんが編集されたり、発行されたりした枚数誌(紙)、パンフレットやビラの類はおびただしい数にのぼるだろう。資金を援助されたり、一手にひきつけられた運動もさまざまだし、個人的にもいろんな面から世話してもらつたり、たすけてもらつたりしたひとは多かつた。又小松さんにもたれかかつた会合もかぞえきれない。

ただそのなかで特にぼく個人として忘れられないのが二つあった。ひとつは日共系の税金斗争のための大衆組紐納税民主化同盟が、生活擁護同盟と名称を変更したところ、ぼくはH地区の副委員長となり、小松さん

にむりにおねがいして書記局に入ってもらって常任として活動してもらったこと。(これは日共の方針とほ

くたちの考え方がうまくかみ合わず、多勢に不勢で結局くじけてしまったけれど、いい勉強にはなったように思う。日共もぼくたちも大衆運動はどのようにお

しすすめるべきかよくわからずきさぐりの状態だったし、そのむつかしさをいやというほど思いしらされたそれからいまひとつは、六九年九月の「決哲追悼集会」のこと。今から思えば、あれが小松さんの最後の仕事であり、たのしみだったのだが、それが意志とちがったことになったのはさぞかし残念に思っておられたことだろう。あの経過をほくは「粉碎する必要もない

集会を、粉碎する資格もない連中が、粉碎しそこねた茶番劇」だと思っただが、小松さんとしては例の調子で破顔一笑できなかったものがあつたにちがいない。あの事件について一文ものされたときいていたが、発表する場所がなかったのか、あるいはみずから発表を断念されたのか、陽の眼をみることなくおわった。「わ

かってにまるかしそんなお気持ちだったのではないかと思つた。

またJAFとアナキストクラブとの分裂を心配されて、その間にたつて何度も仲介の労をとつと怒力されたのも小松さんだった。

今、ぼく自身が、戦後小松さんがなお生々と活躍された年頃に達してみても、ああ、あのまねさへぼくにはとてもできないなあとしみじみ思う。

(注) ハ決哲追悼集会は、小松さんの尽力奔走によつて、中決の唯一の著作集「黒パン」と「祖国と自由」大杉追悼特集号(いずれも大正は年刊・発案)が複製刊行されたのを機会に、関西の物故者追悼集会として廿三日にひらいた。ところがARF一部の若い人々が、追悼ナンセンスと集会粉碎を叫び、会の進行を若干妨害した。

印象にのこること二つ

高島 洋

先に久保さんや笠原さんを失い、今また、小松さんが亡くなられて、戦后、ささやかながらも運動をつづけてきたわたしたちにとって、何んと言っても淋しい限りである。

何年ごろであったか、向井孝やGAの会の人達とわたしは二度小松さん宅を訪回した記憶がある。たしか小松さんの二階で久保、福井氏がタイプ印刷による出版物を盛んに出していたころだったとおもつ。

小松さんはお酒を好まれると聞いていたので、一度のみながらゆっくり若いころのお話しても面白いと大分以前からそう思ひながら、二、三年の何となく多忙だったことで失礼してしまつた。

私が一番印象に残っているのは、小松、福井両氏が東京の石川三四郎氏の亡くなられた時の葬儀に、関西代表として出席され（そう言へば今、この短文をかき

ながらその当時、私が地協の事務担当をやつていて、大阪駅まで二人を見送りにいった。当時地協の財政が苦しかったのでつい旅費を渡さずに見送ってしまった。あとで向井氏からそういう時はあるだけでも渡しておくべきだと注意されたことを、今思いだしている。その報告を帰阪后、関西地協の会議で元気に報告されていたあの当時の姿である。東京地協のなかで対立があったとかで、それを大変気にして批判しておられたことを記憶している。

それからもう二つは、メノン、クマールといふ印度の二青年が世界平和行脚で日本にやってきて東京から広島まで歩いた時、連盟はこれを受け入れしよに歩くことになった。関西では向井氏が殆んど計画を進めた。私は今は亡き笠原さんと未知の若い青年と三人で大阪市と尼崎市との境界に当る旧国道の佐内度橋で

待ち、大阪グループとバトンタッチした時、小松さんも来てくれて自家用三輪車で彼ら青年たちの荷物を次の宿泊地である西宮市まで送ってくれ、大いに助かったことを記憶している。

小松さんも生涯をアナキスト労働者として不変の思

晩年の手紙から

寺島珠雄

小松さんの晩年の手紙、というところになるが、一九六九年八月十五日付でぼくにくれたなかに、

——私も心筋梗塞、大動脈瘤、大動脈弁閉鎖不全症……歩行後の動悸とかが或程度これを証明して居りますので、徒らな長生を考へては居りませんが、何か残すべきものの為にと大事をとり、頭に白きものが半ば以上蔽いながらも生きつづけて居ります。

「ついで」一語がある。

いま読み返して、手紙の翌年四月末、ぼくの本のた

想で費ゆき、あまり表面に立って論議はされなかったけれども、何かと目に見えないところで同志のためつくされたことをおもって、只々悲痛な気持ちにかられている。



めの会に出られて、二次会（もしくは三次会）にもつきあっていたいたあの時は、ずいぶん我慢されたのではないかと身がすくむ。

飛田の旧遊廓のなかにある少なからず座敷の趣向の奇な百番という料亭から、阿倍野筋のマンモスバーのよつな、しかしバンドの生演奏などもあるプレイボーイという店への道程は、だんだんの登り坂が長くて小松さんにはよくなかったに相違ない。

ぼくのその本（『どぶねずみの歌』三書房）には

小松さんがまだ若くて、東京本挽町の全国労組組合連合会書記局にいたころ、「新聞紙一枚をしいて」枕を並べた仲である小川光生（三男）さんが、相当のスペースを占めて登場するので、いやな顔もせずきおっていただけたのかもしれない。

小川さんは社会党から二度衆議院に当選したが、小松さんは九段の議員宿舎に小川さんを訪ねたことが一度あって、その印象を

——どうして代議士秘業になったのかとさと思える明るさが残っており、貴方のことを話題に取り上げながら、国会の丁度猿芝居の忙しい最中を、可成りの時間をしらせてくれました。

と前に引いたのと同じ手紙にかいてある。

もう一通のこっている手紙は一九七〇年の三月で、何日であるかは消印をよみとれないが、藤尾清三郎氏、沢田武雄氏の死去にふれながら、

——未だに本当の気分に成り切れず、僅かに晩酌にウケを晴らす程度、日曜日は一日寝床で過ごすような有

様です。

——藤尾にしてもまた沢田にしても、良い男を失なしました。だがこんな世の中に生き永らえて居る自分を、時にはみじめに考えることもあります。

こんな述懐が挿入されている。

そしていまでは、小松さんが亡き人であり、それより早く小川さんも死んでしまった。二人は、た藤尾沢田両氏をはじめ鬼籍に居を移した多くの人々は、時間の制限はおそらくないであろう世界で、何を語り合っているだろうか。

ほくが小松さんを知ったのはつい近年で、若い時の活動にはまったく無知に等しい。だからといっては少しおかしいが、ほくにとっての小松さんは、いつも思いやりのある、しかもさりげなくそれを示す長者であった。

そしてほくが小松さんに接し得て幸せだったと思っているもう一つは、活字世界の表層に出現しているだけが歴史なのではないということ、断片ではあった

金齒のいっぱいな口で小松さんはよく笑った。笑声はいつも若々しかった。

$$\cap \begin{matrix} 172 \\ 2 \\ 4 \end{matrix}$$

故小松君の想い出

山
口
由

馬齢六十四才となつて、今更ながら、故小松君の想い出をかくのも、恥多しの感がある。

彼に私をはじめて逢ったのは、四十三年前、私が思想的ルンペンとなつて岡山・倉敷・福山・神戸と各地を往復していた頃である。ところは倉敷市の黒魂社の前であり、時は昭和三年の六月初旬であつたと記憶している。

當時私は數之年二十一歳であり、その時代の至上命令であつた、徴兵検査を受けるため、郷里の八幡市（現在の北九州市八幡区）に歸る途中であつた。

折柄タぐれがせまり、裏店の路地でお互いの顔も判
然としなかった。だが以心伝心で小松です。といい、
山口です。といい合つた隣固、もうすでに百年の知己
血盟の同志の如くなつていた。

それ以後、四十余年の歲月が流れたが、その間、日支事變の起きた昭和十三年まで、ある時は大阪、神戸、東京その他を行動を共にし、住む土地を異にした際は、折りにふれて生死をたしかめあつて仲であつた。

私が神戸、大阪、東京等で、ある時は短かく、ある時は長期にわたり、拘禁中たれよりも私の身を案じた

だって、ビックリするのもあたりまえではないか!!
大阪を出る前日、三月三十日に、私は小松さんのところへ使いで黒パンを受取りにいったのだから、声が出てくなくて、ベッドで休んでた小松さん。ごはんをもう二十日ぐらい食べてない、と言ってた小松さん。あの時まだ元気だったのに。二週間足らずで亡くなるなんて。

まだそのときの私は、小松さんがむかし静岡の曲金にいたことも、沢田氏のこと、清水の白書というトラップのはなしも何も知らなかった。その小松さんゆかりの静岡で、私はちょうどそのころ、エビにあたって大ジシマシンにかかり、一週間もねたきり。死亡通知をうけとったのは、どうにかなおりかけたときだった。それから、私は髪をもを切って、又、フワリと大阪へ舞いもどってきた。静岡を思つと、小松さんがうかんでくる。

× × × × ×
三年前の九月末日、家出娘の私は夜の宿を借り、

向井氏につれて、天王寺駅から南海電車平野線にのったのである。世にもまれな一両だけのチンチン電車。カバンをさげた車掌が車内で切符を、パチンパチンと切って売る。駅の改札なんてなくて、降りがけに運転手か車掌に切符をわたす。電車は両側の家々の裏を、軒並にはさまれてしんくのんびり、ゴッペンゴッペン走る。

私かはじめに見た小松さんは、金歯とお酒が印象。お酒をすすめてもらったけれど、ミカンの圧話を私は食べていた。小松さんと向井氏の黒パンの話を、私はおとなしく聞いていたことしか覚えていない。夜もおかつたので、すべふとんをひいてもらってねた。

翌朝、おいしい卵やきのごはんをこちそうになった。小松さんはハチミツとパンと。やっぱりお酒。帰りがけ、まるで当たり前のように「はい、小づかい。映画でもみておいで」といって千円。

私はほんまにとまどった。十八オのその日まで、家の香にしかお金をもらったことがなかった。びっくり

世の春とばかり、占領による解放を記叙し、世のインテリは云うに及ばず、利にさとい商売人・資本家までその大勢になびき、或はシンパ面する風潮は、まるで昨日迄の軍部にアエ迎合するものの裏がえりてしかなかった。何ぞか入党をすゝめられ、かたくなに断ることで、次々に友人たちから孤立するかにちびつたばかりは、共産党でなければ、何でもよい。それが噂と伝説でやぶかに知るしかなかったアナキストなら、なおさら、とばかりとびついたわけである。そして申込書を出してから、百科辞典で「アナキズム」をひいてみるというしまつた。

連盟加入はいつごろだったか、記憶は定かでない。

しかし山口については、平民新聞(以下④と略)10.11合併号12月25日(以⑤と略)3面に、解放青年同盟大阪支部の結成、組織拡大の報とともに「また山口英君を中心に、労働者俳句集団が結成されつつある」とあるので、おそらく連盟結成約半年後位の十・十一頃だろう。(注、ぼくと山口は中学生時代「大平

洋戦争前にいわゆる新興俳句をつくつていて、のち戦中弾圧発刊をうけた八句と評論へ京大俳句へ八天の川へ旗艦」などに関係していた。戦後再会してからぼくと山口は俳句でなく詩の分野に進み、一九四七年二月イオム同盟をつくり詩誌イオムを出しはじめのばかり、まだこの頃山口は再び俳句をつくり出して各方面から注目されつつあった。④の9号には「解放青年同盟(孔版定価4冊送別)」の広告がでているが、そのなかに八和田久太郎と俳句：山口木屋子が見られる。さて、④(1)一月二二日号では、いさく姫路地方委員会と支所の開設が報せられ、大団談者が14名とわけている。だから、多分、ぼくは連盟に十一・二月に加入したように思われる。多分、数ヶ月たって、神戸から笠原勲さん佐竹良雄さん(何れも故人をた)訪ねてきた。これが、ぼくの、山口など昔からの友人をのぞいて最初に出会った先輩のアナキストであつた。

さて平民新聞や一号は四十六年六月十五日や一号をば出したが、その当初から約一年間の間に、紙上に名前

を出している人を拾つてみると、（順不同）

石川三四郎・岩佐作太郎・近藤憲二・水沼辰夫・遠藤
颯・大門一樹・張祜留・綿引邦農夫・布治川桂・信。

高橋光吉・白井新平・白砂健・新谷与一郎・岡本潤・
植村諦・大沢正道・萩原晋太郎・柄沢理一・矢橋丈吉

水沼浩・小川三男・新津米房・横倉辰次・大道寺三郎
宋在柯・李耕人・須藤節・倉地憲司・平岡誠・古川三

樹・望月桂・大島英三郎・島津徳三郎・末三郎・望月
辰太郎・岡崎龍夫・安成二郎・南沢周一郎・渡邊松。

新居格・松尾邦之助・大内義夫・小島康彦・松本千鶴
島津一郎・西村陽吉・山崎今朝弥・桑原健太郎・広海

貫一・女屋勘左内門・大木一治・池松茂之助・辻まこ
と・長夏真一郎・高村藤市・とくに南西の運動と縁故

のいかかつたのは、一逸見吉三、副島辰巳・笠原勉
佐竹良雄・小川正夫・山根義治・久保義・井原末九郎

青山大孝・栗原唯一・貞子・鬼頭公明・武良二・小笠
原秀更・市川白弦・河本敏次・高畑（藤）信一・小西次

郎・小林一信・上月岩太郎・山口英・向井彦……

（一）こう書きならべてみると、この七十余の名前の過
半以上に、ひとつひとつ思い出がおしよせてきて、深
い感慨をおぼえる。そしてこのときから二五年につた
いま、半数以上の人たちは、鬼籍に入つて既に亡い。
それと、大沢、萩原……とかぞえて、わずか五・六人位
が戦後からの運動者で、それ以外はみな戦前の人たち
であること……

さて、ところで、この平民新聞最初の一年のなかに
まだ小松さんは見えていない。山口君に、いつごろか
ら小松さんが出まきたのかときくと、時日はあいまい
だが、たしが東京からの帰路、副島さんが立よつて……
それから、のように覚えていて、という。ぼくの確定
を加えれば、そのころ九州の新内宣佐班が太宰して、
岡山の高畑信一さん定を根城に使つて、それから高畑さん
と格別に近い小松さんの話が当然語られ、そして副島
さんの小松訪問が行われたのだろう。正確には、昭和二年
三月十九日（昭和二年三月十九日）
日号八消息に、「副島辰巳君へ九州総所責任者全国
委員）連絡のため、五日程、途中各地同志と連絡しつ

つ十二日着京。二二日まで滞京予定」とあるので、多分この往きのことだろう。そしてこのとき高畑さん、も小松宅へは同行したのかもしれない。

戦中戦後の永い年月をへだてて、昔の同志に再会した小松さんは、まるで火にふれたマツチのように、すぐ、新しい情熱をもちやして立上つたと思われる。

それは、旬日後の昭和三年四月三〇日七〇号平民新聞記事、へ西部民試会への報道に、(橋岡支局長)

「四月五日、佐賀県鹿島町井原末九郎方で開催。参加二五名。右民試会は新肉活動を中心に宣伝活動のみに従事する者の横のつながりで、現在は姫路から佐賀まで、たゞ広島が包含されていない。東京、村上君、宮城、柄沢君、大阪、小松君には特に陪席をうけ、副島司会、引籠り座長。小笠(姫路)副島(徹)書記として議事に入る。午前九時より午後六時まで討議の結果、一、近畿及び西日本民試会は、四月十八、九日大阪小松宅にて開催する。發起人小松、向井(代理小笠)高畑、副島として、即日通知を発し名古屋・岐阜以西

同志に連絡をなす。二、大阪、岡山、玉島、岩國、

山野田での漫説会計連は九月に行う。三、新肉会を

左の通り改組す。へ新肉会は無政府主義運動に全身を

投じたもののみの集りであることを確認し、会と会員

は一体となり、各人は最低生活の保証をされ、その為

に給料制、及び販売部数諸費制の二本立とし、最低日

額三万円の運動費を積立てることにする。四、評論

紙発行は必要である。方法として、(姫路発行の)へ無政

府主義会試を増員し、後半をそれにあてることが有

力である。その前提のもとに、四月十九日西日本民試

会の討議にまつことにする。(座長小松島代吉と女替)

五、宣伝運動とともに実際運動をす、める段階である

ことを確認。大衆団体組織を自主的自立方向へ促進さ

せるゆきかけ、在野の戦争代連に対し、日本の非戦的

独自性を強調し、この大衆組織を促進する。ハ、来

る五月の日本アナキスト連盟が三回大会提案事項の審

議会及書記長等名称変更の件、横の連絡緊密化の件の

新加盟者の地域連絡の件③全口委員を地域単位として